

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン＝ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

＜自由討議＞

◆パネリスト

インケン・プロール

ジャン=ピエール・ベルトン

櫻井治男

エルンスト・ロコバント

◆司会

井上順孝



自由討議

【司会】ありがとうございます。そろそろフロアーに開きたいと思います。重要な問題がいくつか出されました。神道を複数にして考えることの意味とか、国家神道というものをどのように概念づけるかという問題。Kults というのは英語ですと Cults になるわけですよ。すると今の Cults ていうのはとてもマイナスのイメージも出てきたりもします。さらには Glauben 「信ずる」ということ、こういう言葉を神道に使えるかどうかというドイツの方からの見解、いろいろありました。現代というのは我々に直結するいろんなテーマですので、是非、突っ込んだ議論をしたいと思います。できれば今出されたのに関連する所から入っていきたいと思いますけれども、どなたかご質問ありましたら挙手をお願いします。

【白山芳太郎】皇學館大学の白山と申します。先ほどのお話で言いますと、一私は度会神道の一私は伊勢神道といいますが―ディスコースを研究している者ですので、インケン先生のお話は非常によく分かりました。つまり、今日おっしゃろうとしているところはですね、近現代の神道の本質といいいますか、そのなかに、近現代になりますと神道は救済あるいは救い、そういった側面が特色として出て来ます。けれどもその根底にそういう、Heil とおっしゃいましたでしょうか、そういう平らかに安らかに穏やかに、こういうことをずっと願ってきますから、祝詞の言葉のなかにもずっとそういう言葉が古来続いていますので、そういうものをやはり持っておったんだということをおっしゃろうとされたような気がするんです。日本には各県に護国神社ができます、そして国全体には靖国神社ができ、日清、日露、第一次、第二次（世界大戦）と戦争に明け暮れますから、家族兄弟が死んでいきます。で、そういう人たちを救い給え助け給えと願っていきます。そういう神道の新しい展開といいいますか、そういう部分、いろんな宗教から学んで出てきたんだろうと思います。そのもとの、本質的な部分をさらにこれからやるべきではないかと、こういうご意見のように承りましたがそれでよろしいのでしょうか。ご確認申し上げます。

【プロール】それで正しいような感じがします。例えば度会神道、伊勢神道、私が分かる限りに、別に救いについてのもではなくて、それはある優越性あるいは仏教との区別についてのディスコースです。だから人々が望んでいること、あるいは宗教的な助けについてのことではない。だから、櫻井先生がおっしゃったような諸神道の理解は、私はちょっと別の理解を持っていると思います。やはり私は黒田俊雄から大きな影響を受けましたから。でも黒田によると神道はなくなるんです。それは望ましくないです。だから妥協として、諸神道という表現を導入するのはどうかなと思いました。

【白山】ありがとうございました。じつは黒田俊雄さんとはご生前よくお話ししたこともあります。ご本人は顕密体制論を展開させ、神道を非常によく研究してらっしゃった。神

社の勢力あるいは寺院の勢力、そういったものを中世社会の研究の上で持ちだした方なんです。その点から言いますと、国学以前は神道ではないというのは、ちょっとあの人の全体の意見としてはそぐわない。まあ、二面性を持っていると思います。で、インケン先生のような感じで黒田さんは普段はおしゃべりなさってました。だからかなり神道のことを理解されてらっしゃったと思います。そんな印象を持っています。

【司会】次の質問をお願いします。手前の方どうぞ。

【玉川千里】いま例えば神道について複数かどうかという問題について私なりに申しますと、櫻井さんがおっしゃったように神道という言葉自身が日本に伝統的な神観以外の仏教などいろいろ入ってきてはじめて、仕方ないからできた言葉だという意味ではそう思いますが、考えると仏教だってキリスト教だってその中にいろいろ宗派があります。だから神道もその中に教派神道とか神社とか国家とかいろいろあるけれども、一般の人間には複数か単数かなんていう議論はあまり関係なくて、単数でいいんじゃないかと。

それからひとつお聞きしたいのは、信仰が無くても畏敬というか、感謝とか祈願というようなことだけじゃやっぱり西洋的感觉でいうと宗教といえないんでしょうか。

【司会】質問が内容的に2点となったわけですがどなたか…。つまり複数っていうことをことさら主張しなくても、実際どの宗教も本当は複数ではないかというご意見です。キリスト教も Christianity と言っているわけだから、神道もひとつでいいではないかということなんです。複数だという人に答えて頂きたいですね。

【プロール】非常に大切な指摘をしてくださってどうも有り難うございました。でも研究者は、お互いの宗教、例えばドイツとか日本とかアメリカの宗教を比較するために、そのような概念を作らなければなりません。

もう1つの信仰についての質問なんですが、信仰がなくても宗教的な態度は宗教であると思っています。

【司会】ただ、その場合、Glauben という表現はふさわしくないということですか。つまり Glauben という言葉を使うと、いま質問者の方がおっしゃった様な態度には当てはまらないとインケンさんは言っているのかどうか。

【プロール】先ほどの説明によると、それは確かに Glauben ではないでしょう。それは不思議さ、あるいはヌミノウス—この言葉は私は好きではないんですが—とか、まあ神に対しての特別な態度ですね。でもそれはやはりドイツ語の Glauben という言葉として概念することはなかなか難しいと思っています。お互いの理解ができなくなるんです。そういう言葉を使うと。

【司会】でもそれは Religion ではあるんですか。

【プロール】宗教であると思っています。問題なのは、宗教という言葉はわりに新しい言葉です。だからそれは宗教かどうかというのは、日本の長い歴史について言うとき、あまり意味がないかもしれません。でも、その宗教についてのディスコースは、この150年大きな影響力を与えてきたわけです。日本人、あるいは私たちも「宗教」という言葉が欲しいのかもしれません。

【司会】ロコバントさんいいんですか。ロコバントさんも、複数の方がいいっていうお考えですか。

【ロコバント】プロールさんが先ほど言った、妥協としてという根拠付けには賛成しませんけれども、結果的には同意します。といいますのは、おっしゃるとおりキリスト教だってカトリックからエホバの証人まであるわけです。とても同じようなものとは考えられないです。それでも Christianities とは誰も言わない。いつも単数で言うのは当然で、すべての制度はそうですね。ローマの法王 pope、もそうです。ルネサンス時代と古代のものは全く違う存在で、それでもいつも単数で物事を言います。それは当然です。しかし、ここにひとつの政治的というか思想的背景があります。日本国内でも、そして外国人の研究者の中にも、先ほどプロールさんが批判したイモース先生みたいに、神道は古代から今日まで、日本の固有の宗教として一切変更なしにそのまま生き続いた。そして日本人のアイデンティティーはそこにある。このような意見があり、そしてそれは一理があっても、やはり単純すぎると私も思います。

それに対する反発が起こって、いや古代のものと今のものは違います。国学はある程度の影響を及ぼして国学以降の神道とそれ以前の神道は同じものではないという主張も当然です。今までかなり普及している誤解を避けるために、それを是正するために、臨時的に向こう 50 年間、複数で神道を使って、その後再び単数の神道に戻ればいいではないかと思っています。

【司会】はい、大原さん、どうぞ。

【大原康男】國學院大学の大原と申します。2点ほど感想と共にお聞きしたいことがあります。ロコバント先生が先ほど国体という言葉についてはまだ自分には決定的な訳がないと言われた。その時に触れられましたけれども、ある言葉を外国語に翻訳する際に、少なくともその言葉だけではなく註をつけるとか、様々な工夫をしながら、できるだけ正確に異文化間の翻訳をやっていくと言われまして、まことに私は同感だと思います。実は個人的な話になりますけども、今から十数年ぐらい前に国体という言葉がどのように外国語に翻訳されているかということ調べたことがあります。で、だいたい英語中心ですけども、17~8 ありました。その際には、State という言葉はほとんどなかったです。National Constitution、National Organization、National System、National Structure、National Entity、National life、National Principle といったようなのはあるわけで、だいたい State じゃなくて National という言葉を使っておりました。日本人が英語に翻訳する場合も、外国人が英語に翻訳する場合もどちらも National という言葉を使っておりました。

その中で注目すべきなのは、無名の人ですけどもアメリカ人でリードという人がですね、そのものズバリの『国体』とう本を書いています。で、それは 1940 年の本ですが、その際彼はですね、やはり国体という言葉はもの凄く訳しにくいと。これはアメリカ人におけるアメリカニズムとかドイツにおけるファーテルランドのような、ちょっと訳し難いセンチメンタルな言葉であるということです。それで彼がやったやり方は、例えば日本主義

だとか、国民道徳だとか、大和魂だとか、日本精神だとかいった、周辺や類縁的な言葉をいろいろ探索してそれから、それらの語を基にして積み上げていって国体という言葉に到達しようというスタイルをとったんです。これは極めて迂遠な方法であるけれども、異文化で発生した言葉を別な文化の言葉に翻訳する際においては、今でも通用する方法ではないだろうかということ、これはコメントでございます。

もう1つは、Shrine という言葉が出まして、で、Shrine は何十年前か、比較的早い時期に、Shinto Temple、Buddhist Temple というのが分化して、お寺は Temple で神道は Shrine になってきた、まあそういうふうな形で欧米諸国においてはもう理解が進んでいるかもしれません。しかし、これもまた個人的体験、それも今から20年近く前ですが、デンマークの神学校の学生さんが日本に修学旅行に来られて、その時に我々とも意見を交換した。その際に靖国神社にも行って来た。そうすると我々に対してきた質問が、「靖国神社には地下何メートルぐらいの大きな壕があるんですか」というもの。というのは Shrine のもとの意味の中には、いわゆるお墓の前に建てられた礼拝施設であるいわゆる廟のようなイメージが強く残っていたようであります。つまり、246万人の戦没者が祀られているなら、どんなに小さいものでも246万個の空間が地下にあるというふうに考えて、そういうような質問が出たということが分かったんでね。

Shrine が廟というような意味を持つておるとすると、日本の神社のなかにそれに該当するのは甚だ少ないわけです。香椎宮だとか太宰府天満宮だとか、ある意味ではごく少数派なんです。そうしたようなもとの意味が Shrine にあり、それが今なおそういう形で—デンマークの神学校の方ですから宗教のことも専門でしょうけども—、その方々の誤解を招いたとするならば、Shrine という言葉をこのまま何の留保もなく使っていいのかなという気がいたしました。これは質問です。

あともう1点、Glauben のことですが、黙祷という言葉があります。Silent Prayer という言葉ですけども、これは少なくともキリスト教においては大変重要な宗教的営みを示した言葉だと私は思っています。ところが我が国におきましては、黙祷というのはいわば無宗教式の慰霊祭とか葬儀です。この間も外務省の2人の外交官が亡くなったときの外務相の葬儀でも、Separation of Church and State (政教分離) という観点から、これは宗教とは関係ないということで、黙祷という言葉が戦後ずっと使われています。

これはある一種の逃げ口上ですけども、そこがその黙祷という言葉はキリスト教徒においては大変大きな意味がある、黙祷という言葉でそうしたある種の儀式を行うとなってくると、もの凄くそれに対してこだわるところが今日にもあるんじゃないかと思います。かつて占領下に貞明皇后という方が亡くなられたときに、文部省がある時間に併せて黙祷をせよといったらクリスチャンから猛烈な反発が来しました。これは恐らく黙祷という言葉に関するいわば日本人の感覚の違いというものが、Glauben という言葉に日本のそうした宗教的営みがどこか重ならないということもあるんじゃないかなという気がいたしました。ただ質問は今申し上げました Shrine という言葉をそのまま使っていても別段問題ないのでしょうかということです。

【ロコバント】やむを得ないと思います。といいますのは、神社関係のその他の専門用語のなかにもどうしても訳せないものがたくさんあります。例えば神主さんのランク。宮司とか権宮司はまだ強いて訳せますけれども禰宜とか祝とか、権禰宜、主典、宮掌となると訳せない。訳そうと思えば全くのナンセンスになる。ただのハイアラキーを示すだけです。番号を付けて訳すか。それでも訳せないですね。そうした訳せないものはたくさんあって、そうすると少しでも訳せるなら訳すということをしなないと、何でもかんでも日本語だらけになります。そして、我々みたいに少し日本語をかじったことのある人間は、ドイツ語か英語で、日本語の単語が入った文を読んでも全然苦勞しません。しかし一般のヨーロッパ人から見ると、日本語は全く縁がなくて日本語の多い文を読むことができない。

それで Schrein の意味なんですけども、もう 1 つ、少なくともドイツ語において、ダンス、洋服に入れるとかいうようなやつ、これも Schrein です。もちろん建物を見てダンスではないことは一見して分かります。そうすると、註をつけて、神道の Temple は慣習的に Shrine と呼ぶようになったという註さえつけると何の問題もなくなると思います。つまり僕だったら、Shrine をいつも説明付きで使い続けて誤解を起こしたことは僕の知っている限りにはありません。

【大原】そのことなんですけども、Shinto Temple ということばを使うことのほうが、より誤解がないということはあるに決まっています。つまり Shrine という言葉に、今言いましたような、誤解を受けやすい要素があるとすれば、Shinto Temple という言葉を逆に使い続けることで何か不都合なことがあるのかなのかということです。つまり Shinto Temple と Shrine を比較した場合ですね、Shinto Temple の方が、何か具合が悪い所があるのかと私は思ったのですが。

【ロコバント】これは怠け者の問題なんです。Temple を使うと、Shinto という 6 つの文字を、別にその都度余分に書く必要がある。いつも Buddhist Temple、Shinto Temple といわなくてはならない。この Buddhist と Shinto を省略する方法として Temple と Shrine という習慣的な区別になりました。書く際の省エネのねらいです。

【司会】ほかの質問をお願いします。

【板井正斉】皇學館大學社会福祉学部の板井と申します。ちょっと前に、ドイツのボン大学でヨーゼフ・クライナー先生の授業に出席させてもらったことがあったのですが、その中に日本の村落祭祀、いわゆる村祭りを毎回取り上げる授業がありました。たしかその講義が Brauchtum des Volks-Shinto というタイトルだったと思うんですけど、この場合に Volks-Shinto という言葉が使われていて、僕はそのまま民俗神道の慣習とかなんとかというようなことで捉えたんです。先ほどのご発表で Volks-Shinto という使い方はちょっと批判があるという所も含めて、村落祭祀、日本での民俗的な神道でのお祭りというのはどのような形で訳せばいいんでしょうか。

【プロール】それは非常に難しい質問になります。なぜかという、とにかく Volks-Shinto はあまり適切ではない。Volks-Shinto という言葉を使うと、Volk の宗教がある、あとはエリート宗教もあるというような前提に立つことになる。それはやっぱり間違いです。例

えば、イアン・リーダーとジョージ・タナベ (George Tanabe) の *Practically Religious: Worldly Benefits and the Common Religion of Japan* という、わりに新しい日本の現世利益についての本がありました。その本の中で日本には仏教と神道という2つの宗教が存在しているというのはあんまり適切ではないのだろうかという仮説が出て、一般宗教についての話が出ているんです。ドイツの宗教学者のマイケル・パイ (Michael Pye)、彼も日本学者なんですけど、わりに宗教学の中で活躍している先生です。パイ先生によると日本の宗教は一般的なフィールド (common field) がある。そのフィールドの中でも神道や仏教はなかなか区別しにくいという結果が出ているんです。だから祭りや一般的に神社で行っている行事についてドイツ語で表現するとすれば、ただ宗教という言葉で足りると思います。

【ドウウォルフ】慶應義塾大学のドォオルフでございます。私は充分分かっていないかもしれませんが、抽象的な概念の場合は誤解されることが多いと思いますけど、国家神道とか神社とかお寺の場合は、それほど大きな問題ではないような気がします。逆に言えばドイツ語では *Landeskirchen* といいますね、日本語に訳すと州教会になります。ドイツ連邦共和国にはアメリカのように州がありますから、州教会という言葉だけで多くの日本人はその意味を誤解すると思います。でもドイツについて研究している、習っている学生などは文脈では充分分かると思います。

問題は抽象的な、宗教的な概念です。さっき *Heil* と *Erlösung* という問題に戻りたいんですけど、もう一度説明して頂けますか。*Heil* は例えば最近出版されたゲッパート (Lisette Gebhardt) 先生の *Japans Neue Spiritualität* という本には *Heil* という言葉がよく出てますね。よくいわれてますが、キリスト教徒以外に日本人には罪の意識はあまりないといいますけど、でも新しい動きでは *Heil* だの救いを求めている人が多くなったような気がします。そして *Heil* という言葉が適切かどうか知りたいし、そしてドイツ語には *Erlösung* という言葉には意味がいろいろあります。例えば主の祈りでは *Uns erlösen vom Bösen* と言います。「我々を悪より救い給え」というのと同じです。その場合は大丈夫でしょうけど、キリスト教的な救いですね。ですからどうでしょうか、*Heil* と *Erlösung* の問題についてもう一度説明していただけますか。

【プロール】実は私は、うちの宗教学研究室のツィンサー (Hartmut Zinser) 先生と一緒に今年の学期、*Heil* と *Erlösung* についての授業を行っているんですが、今まで適当な文献を見つけることができなかったです。だからその定義づけをするのはなかなか難しい。大切なのは、*Erlösung* は死後の救いですから、それはあまり日本の宗教的な観念には適切ではないということです。もう1つは、先ほどおっしゃったようなリゼット・ゲッパートの本です。実はリゼット・ゲッパートは友達なので、私もその本については議論しました。それはやっぱり *Heil* ではないかなあと思いました。それはまた別な知識的な救いについての話です。先ほど言ったように、今、神道や一般的に宗教についてディスコースが出ているわけです。例えば霊的な知識人も、そのディスコースに活躍しているんです。彼らは宗教について話をしているんです。それは実践の宗教を特別視しなければならないでしょう。とにかく神社に通ったり神主さんにご祈禱を頼んだりする活動における言葉は救い、

ドイツ語では Heil で適切であると思っているんです。

【司会】これは、シチュエーションで訳し分けなきゃいけないことではあるんですが、インケンさんは Erlösung と呼びうるような場面が神社神道や神道系の新宗教には見あたらないというふうに考えているんですか。つまり、お祈りするあるいは神社に行く、あるいは神道系の教団に行くときにそこでお祈りする。その時はもっぱら現実の世界のことだけであって、死後のことはあまり考えていないという、そういう理解ですか。

【プロール】救済は彼岸に対しての希望が入っているんです。また、救い、つまり Heil には此岸志向的な態度が強いと思っています。

【司会】他の質問の方をお受けしたいと思います。

【中野裕三】中野と申します。先ほどの Glauben の話に戻らせていただきたいんですけども、私はやはり Glauben を使うべきと考えます。柳田国男が神道の場合は信仰じゃなくて信頼なんだという、一般の民衆のお祭りの中ではやっぱり信頼として捉えるべきなんだとした説は有名です。けれども、例えば昨日の国学のシンポジウムで、一国学っていうのは非常に幅広いですけども—いわゆる道の論を説いた国学者の根底にあるものは、やっぱり天津神、国津神、神々に対しての敬虔な信仰だと思うんです。それと同時に例えば、伊勢神宮で、時代にともなって多少の改変はあったとしても、伝統のしきたりというか、古いやり方のままにずっと祭り続けてくる、それを継承していく人々の心の有り様というのは、庶民の部分の信頼としておくような部分とまた違う部分があるんじゃないか。そしてそういう伊勢のお祭りにしても、国学者の説いたものにしても、それは神道だと私は思うんです。そうすると、じゃあもし Glauben という言葉を使わないならばドイツ語でどういう言葉でそういう信仰の有り様を説明すればいいんだろうかと。私の質問はそこです。

【プロール】ひとつは、別の区別が必要です。確かにもちろん日本の神道において信仰というのがあてはまることもあるでしょう。でも一般的な意味で信仰を使わない方がいいと私は言ってたんです。私はよく Überzeugung という言葉を使うんです。

【ロコバント】Überzeugung を日本語に訳せば確信となり、あわないと思います。妙な感じがするときに、神がいると確信している。危ないと思います。

【司会】ドイツ語の Glauben という語のニュアンスが、日本語の「信じる」という語とどれぐらいズレがあるのかということも大変大きな問題なんです。その前にちょっと触れたいことがあります。私は 1990 年代から学生の意識調査をして参りました。そのときに、「何か信仰をしているものがありますか」という聞き方をすると、イエスと答える人はだいたい 5% から 6% なんですね。しかし、「初詣に行きましたか」というと、だいたい 50% ぐらいがその年の初詣に行きましたと答えるわけです。ですから、後者の行為に対して Glauben というのは合わないかもしれないんですが、信仰をしていますかと聞いて、「はい」と答える人の意識というのは、やはり Glauben に近いんじゃないかというふうに思うんですよ。

【プロール】でもその調査の中は、あるかどうか、決めることができないという答えもあったでしょう。だから信仰している…もう 1 つの選択肢はなんでしたっけ。

【司会】信仰を持っている、持っていない、無いけれども宗教には関心がある、宗教をもっていないし関心もないという、グレードを4つつけてやりました。

【プロール】その学生への調査の中では、「あるかもしれない」という答えが可能だったと思います。いずれにしても一時的な信仰、こういう言葉も適切であると思っているんですけど、ずっと決めている、制度的な宗教の内容を信じるわけでは、大抵の場合ないと思います。

【司会】司会者があまり発言してはいけませんので、他の方の、もうあまり時間がありませんので…。稲場さん、どうぞ。

【稲場圭信】日本文化研究所共同研究員、神戸大学人間科学研究センターの稲場と申します。2点あります。1点はまず、先ほどから Heil と salvation の救済という話が翻訳のことで出てきましたが、例えば Divine Protection、Providence とか、日本語でいう神仏のご加護があるという、その加護という言葉との使い分けとかが、ドイツ語やフランス語であるのかどうか。それからもう1点ですが、言語を翻訳する際の苦労というのは、その言語というのが社会的、文化的制約、影響を受けているということですから、ひとつ翻訳をする場合に、ある言語が社会的制約の上で心の動きが言葉によって想起されるということもあると思うんです。まさに宗教的な言語であれば、まさにそれは信仰なので、心理的な心の動きが現れてくる。で、それを翻訳する場合に、ちょっと例が思い浮かばないんですけど、ある言葉をドイツ語、英語、フランス語に訳した場合に、その文化的な背景でそれが理解される翻訳の混乱性ということと、さらにその、単純に言葉を訳す、あるいは文化的に説明をした、さらにその向こうにある、まあそれによって心の動きがあるという、そこらへんを翻訳する場合にどういうふうに乗れ越えられるのか、あるいは苦労があるのかというのを、もしありましたら教えて頂きたいと思います。

【ベルトン】訳の問題については…。ほとんどそういう仕事をしてないけども、ただそのどうやってその壁を乗り越えるかといいますと、やっぱり相手です。例えば翻訳するテキストが学者の間で使うテキストか、一般化されて普通のフランス人の読むテキストかで、これを区別しないとちょっと難しくなると思います。例えば学者の間は、やっぱりある意味ではその本を読む人たちはだいたいその国のことを少しぐらいは知ってる。だから註とか解説しなくてもだいたい意味が分かる。問題は一般的な方ですと、その翻訳というのは異国の文化のプレゼンテーションという形で、その中に大事な言葉とか表現とか、文化を知らない場合は、意味がないとか、外から見ると意味がない言葉が出てくると、その時は一番苦労しますね。

【司会】具体的な質問がひとつありましたけれども、神仏の加護、加えるに保護、護るというようなことですが、それに当たるようなドイツ語、フランス語っていうのが考えつくでしょうか。

【プロール】それは割と簡単であると思います。それは göttlicher Profit でしょう。この言葉は、キリスト教の影響、差別のニュアンスとかは余りはいつていないし……。

【稲場】ドイツ語から逆に日本語に訳す場合を考えると、その Heil という言葉で救済とか

救いということよりも、インケンさんがずっと話されている内容というのは神仏の加護という言葉の方がニュアンス的に近いというか、先ほどずっと話されている内容からすると印象を受けたんですけど。

【プロール】それはちょっと違うと思っているんです。私が言いたいのは göttliche Wohltaten、日本の宗教の中心は göttliche Wohltaten ということです。それは神々の御利益になると思っているんです。だから現世利益、せいめい利益のことなんですが、あるいは功德の言葉なんですが、その göttliche Wohltaten は göttlicher Profit、利益のドイツ語の言葉は Profit ですが、それはまたちょっと差別が入っていると思っているんです。Utilitaristisch はどうでしょうか。

【ロコバント】功利主義的。

【プロール】Nutzen と言えば、それは功利主義的になるんですが、göttliche Wohltaten、これは日本語でどういう訳になるんでしょうか。神々が与えるいいもの…。

【司会】「ご利益」ですね。「おかげ」とか…。

【プロール】「おかげ」。それは学生や一般的なドイツ人に日本の宗教を説明する場合、日本の宗教では、göttliche Wohltaten が中心になる、人々はこれを神々から願っているという説明をしています。

【司会】時間もだいぶ迫りました。あと1人だけ質問をいただけたらと思ってますけれども、どなたか最後の1人になるという勇気のある方は…、はい。

【ヘイブンス】さっきの大原先生の shrine の問題ですけど、これも非常に歴史の長い問題です。おそらく、神社は shrine でお寺は temple であるということは、神仏習合の時代からの事情が関係していると思うんです。つまり大きな施設の中に、どっちかというところと西洋のヨーロッパの例から見れば、カトリック教会の中に小さな祠みたいなものがあればそれは明らかに shrine です。もともと shrine は教会のなかに聖人の遺骨を納める場所だった。そしてそれを崇拝する所だったんですけど、まさにそれはある意味では廟です。けれどそこから発展して、遺骨と全く関係なくマリアの像とか、それも Maria shrine とか呼ばれた。ただその聖人を崇拝する場所と言うようになった。そういうことを考えると、神社も祠としての性格からいえば、shrine は適切だと私も思います。

もう1つ、日本の場合も廟という言葉があるんですけど、例えば江戸時代、近世までは神宮は日本の総廟という表現としてかなり使われて、私もどうやってそれを翻訳するかといつも困ってるんですけど、それもありますから別に例としてないことはないと思います。

【司会】ヘイブンスさんは以前に、Shrine という訳語に関して、『神社新報』紙上で論争をされたということがありましたので、今のコメントだと思います。

私がこの企画—〈神道〉はどう翻訳されているか—を致しましたときに、これまでは神道を比較的歴史上の問題としてどう訳すかということでしたけれども、今の我々の身の回りの出来事を訳すということに非常に関わるテーマだというふうに思ったわけです。実際信ずる、glauben なんて言葉で、神道における態度を表現してはまずいんじゃないかとい

うことも出てきました。ここまで議論が展開するとは、正直思わなかったんですけれども、でもそれは面白い意見だと思いました。

神道の言葉のあるいは概念を外国語に訳すというときに、実をいうとこれまでは、ほとんどそれぞれの国の人に訳されたままですね。変な言い方をしますと。もうどう訳されたか我々は関与できないと。そして、その訳された言葉でそれぞれの国で理解されているというのが現状です。私はやはりこれからでは不十分かなと思うんです。日本人のほうが、訳された言葉、概念を検討して、果たしてそういう言葉で訳されて我々はそれで適切と感じるのかどうか。多分違う意見はあると思うんですが。しかし少なくとも、そのように紹介されている。そういうことを知っておかなければならない。例えば、前回の9月のときも問題になりましたけれども、国学は *nativism* というのが一番ポピュラーな訳だということがいわれました。我々がそれまでその言葉で連想するのは、カーゴカルトとか、そういう類のものです。外国ではカーゴカルトと国学はほとんど同じカテゴリーで理解される可能性もあるわけです。どのように訳されてどのように理解されているということに、今までのように無関心であってはいけな。それがこの連続のシンポジウムのひとつの理由であります。

このシンポジウムでは、いろんな意見が出て、個人的にも非常に面白かったし、またいっそう深く考えていかなくてはならないと感じたことも多々ありました。そして、英語圏だけではなくてドイツ語、フランス語、あるいは韓国語にも目を配らなければならない。できればロシア語や中国語への翻訳も扱えたら面白いだろうなとは思います。つまり、神道が、どのように外国で紹介されているのか、そのことにもっと注意を向ける、その一石になればということが、連続シンポジウムの一つの目的でもあります。来年度どういうテーマにするかまだ決めておりませんが、こうした成果を踏まえて、そして、先ほどロコバント先生も言われましたけれども、神道事典を英訳するならとにかく悔いの残らないものにしろということでした。少なくとも一年間の編集作業を経て、内容を調整してオンラインで公開していこうと思っています。こうしたシンポジウムの成果もそこには取り込んでいきたいと思っていますので、是非ともまた今後もこのプロジェクトに関心を寄せて頂ければと思います。今日は皆さんに長時間にわたり討議に参加して頂きました。またいろんなご意見を賜りましたこと、非常にありがたく思っています。最後にもう一回パネリストの方々に拍手をお願いしたいと思います。〈拍手〉